

## PROGRAM

## NOTES

柴田 克彦 (音楽評論家)  
Katsuhiko Shibata

### 【プログラム 1】

#### シューベルト:交響曲第7番 口短調 D759「未完成」

“歌曲王”と呼ばれるウィーンの作曲家フランツ・シューベルト(1797-1828)が、持てるロマン性を存分に発揮した交響曲。全4楽章を予定しながら、第2楽章までしか完成しなかったために「未完成」の愛称をもつ。未完成の交響曲は世に少なからずある中で、この曲だけがそう呼ばれるのは、ひとえに無類の美しさゆえであろう。

1822年10月30日に作曲が開始され、第3楽章の9小節目までのオーケストレーションと途中までのピアノ・スケッチをもって中断された。にもかかわらず、1823年グラーツのシュタイアーマルク音楽協会の名誉会員に推挙された御礼として、仲介者ヒュッテンブレンナーのもとに2楽章分の自筆譜が送られ、そのまま留め置かれた。そして没後37年を経た1865年にウィーンの指揮者ヘルベックが発見。同年12月に当地で初演された。以上がよく知られた経緯だが、現在ではヒュッテンブレンナーへの個人的な贈り物だったともみられている。

曲は、旋律美と瑞々しいハーモニーに溢れた名作。2楽章ともに3拍子系の音楽で曲調に差異を感じさせない点もユニークだ。また管楽器のソロが際立っており、中でもトロンボーンにかくも出番を与えた交響曲は史上初といえる。なお従来は「第8番」と呼ばれていたが、最近では新整理番号の「第7番」と表記されるケースが多い。

**第1楽章:**アレグロ・モデラート。冒頭で低音弦楽器が奏する主題が随所に登場してシンボリックな役割を果たす。木管楽器が呈示する第1主題、チェロが呈示する第2主題共に美しさが横溢。

**第2楽章:**アンダンテ・コン・モート。弦楽器が出す第1主題とクラリネットが出す第2主題を中心に、憧れを湛えた甘美な楽想が展開される。

#### ベートーヴェン:交響曲第5番 ハ短調 Op.67「運命」

インパクトのある出だしと相まって、クラシック音楽の象徴ともなった劇的な交響曲。ドイツに生まれたウィーン古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)の中期の代表作でもある。1807~08年、対照的な曲調の第6番「田園」と相前後して作曲され、1808年12月ウィーンで同時に初演された。

着想自体は完成の約4年前に遡り、「ジャジャジャ・ジャー」の4音=「運命動機」を緊密に練り上げるまでには、かなりの推敲が重ねられた。また「運命」のタイトルは、「『運命はこのようにして扉を叩く』とベートーヴェンが語った」という弟子シンドラーが伝える逸話に由来しているが、彼の話は捏造が多く、これも信憑性が疑われている。